

学術・技術・芸術のバランスのとれた運営と そのような体制での若手教育のシステムづくり

Balanced Advancement of Architectural Science, Technology, Art and Development of
Original Educational System for Young Members

竹脇 出 | Izuru Takewaki

第56代日本建築学会会長・京都大学教授



先般の日本建築学会(以下、本会)の役員選挙において会長候補に選出され、理事会において承認された後に、第56代会長に就任いたしました。身に余る光栄であるとともに、その責任の重さに身の引き締まる思いであります。5月1日に元号が改元され、平成から令和へ新しい時代の幕が開きました。来年には約半世紀ぶりのオリンピック・パラリンピックが東京で開催される予定であり、2025年には大阪で万国博覧会がこれも約半世紀ぶりに開催されることが決まっています。このような激動の時代に、本会の進むべき道を深慮し、責任ある立場を全うして参りたいと考えております。ご支援のほど、よろしく申し上げます。

私は、建築界および本会の持続的発展のために、「学術・技術・芸術のバランスのとれた運営とそのような体制での若手教育のシステムづくり」の促進に努力したいと思います。

本会はこれまで、学術・技術・芸術を主要な三本柱として発展してきました。学術・技術分野では多くの場合、基礎理論・基盤技術の蓄積型教育や評価が可能であり、本会では奨励賞をはじめとする若手の表彰制度も存在していました。それに対して、芸術分野では、人間の感性や実績に負う部分が少なからず存在するため、必ずしも積み上げ型の教育や評価には馴染まない側面を有しており、シニア世代にならなければなかなか表彰を受けることが困難となっていました。そこで、芸術系若手の学会活動参加に対するインセンティブの付与を目的として、新しい評価制度を導入することを私の監事時代の報告に盛り込ませていただき、それが数年前から開始された「作品選集新人賞」の創設につながりました。各分野の同世代の会員が同様に活躍できる仕組みづくりの発端が構築さ

れたといえます。

一方、建築は元来、計画/設計、構造、環境に代表される多様な分野を包含しており、それが建築を特徴づけています。従って、これらすべてが有機的に連携しなければ優れた建築の実現は期待できません。それを可能とするのは、「建築活動の実践」とそれを支える文理融合型の「広範な基盤技術・理論」であると考えます。わが国では、最近ワークライフバランスや働き方改革が盛んに議論されており、生活の質をどのように高め維持するかが求められています。その議論においては従来にも増して多くの学問分野との協働が不可欠であり、そのためには、建築を構成する各分野の融合はもとより、工学系としての従来の枠に留まることなく、文理融合を含めたより大きな枠組みのなかで「広範な基盤技術・理論」の維持・発展に取り組むことも必要です。

持続的発展を可能とし、ワークライフバランスにも配慮した新しいライフスタイルの創造には、分野、文化、風習、年齢、性別などを異にするさまざまな人々の協働が鍵となり、それを実現するためには、深い教養に裏付けられた実践型人材の育成を積極的に推進することが大切です。「学術・技術・芸術のバランスのとれた運営とそのような体制での若手教育のシステムづくり」はこのような人材づくりに欠かせず、建築界と本会が果たすべき使命が一層明確になると考えられます。

「学術・技術・芸術のバランスのとれた運営とそのような体制での若手教育のシステムづくり」を進める際の具体策として、以下のミッションを推進したいと存じます。

1—— バランスのとれた体制での若手人材の育成

学術・技術に関連する若手会員は多くおられますが、芸術に関する若手会員の増強がこれまで懸案となっていました。前述のとおり、私が監事のときに尽力させていただきました40歳未満の会員を表彰する「作品選集新人賞」の創設に対しては高い評価をいただき、学術・技術・芸術の三本柱をバランスよく発展させながら若手人材の育成を行っていきたいと考えています。また、計画/設計、構造、環境が有機的に連携しなければ優れた建築を実現することは困難となるため、各分野の同世代の会員が同様に活躍できる仕組みづくりおよびそのような場が必要と思われます。そのために、計画/設計、構

造、環境のすべての分野から参加できる共通の課題の設定とそれを考える場の創設にも積極的に取り組みたいと考えています。さらに、工学系のなかでも高い女子学生比率を誇る建築において、一層の女性参画促進を通じた優秀な人材の確保という視点から議論を深め、それを推進するための支援策の検討と体制の整備をめざします。

このように、学術・技術・芸術、計画/設計・構造・環境、各世代間、男女間など、種々の面でのバランスを適切にとることが、本会の持続的発展にとって重要と思われます。

—

2——レジリエントな社会構築への建築の貢献

(レジリエント建築の創造に向けて)

「学術・技術・芸術のバランスのとれた運営とそのような体制での若手教育のシステムづくり」を考えると、計画/設計・構造・環境のあらゆる分野の会員が集まるうえで共通の目標を設定することが必要であると考えます。私は「レジリエント建築」というテーマについて、あらゆる分野の会員が集まり議論し創造する場を設けたいと考えています。わが国では昨年、地震・豪雨・台風などの自然災害による被害が、従来にも増して大きな問題となりました。そこでは、これまでの統計的な常識ではカバーできないような事象が多数観測されています。そのような予測が困難な時代においても有効となる方策について、「レジリエント建築」という側面から建築界および本会を挙げて取り組む必要があると思われます。また、学術・技術・芸術のあらゆる面で良質でレジリエントな建築ストックの形成には、既存建築の耐震・機能改修などは不可欠であり、低炭素社会実現の鍵であるカーボンニュートラル化にも既存建築の品質向上は欠かせません。さらに、国連によるSDGsの17の目標とも密接に関連付けて建築の強化をめざします。

—

3——幅広い会員の要望に真摯に応える運営

本会を支える大多数の会員が、学術・技術・芸術、計画/設計・構造・環境、各世代間、男女間など、種々の面でのバランスのとれた体制での学会活動に積極的に参画し、会員であることのメリットを一層実感できるように、ICTやデータサイエンスの活用によって会員対応システムの向上を推進します。これまでに本会が蓄積した学術資料・情報は多大なものがあり

ますが、それが会員すべてに十分利用可能な状況になっているとはいえません。歴代会長のもとでWebの刷新がなされ、かなり電子化が進んでいますが、さらなる改良が必要と思われます。そのシステムづくりを会長として積極的に先導できればと考えています。さらに、東京一極集中という現象を真摯に受け止め、本会の持続的発展のためにも、支部の持続可能な財政基盤づくりや本部・支部間の情報共有を推進するための体制の整備に努めます。

—

以上、私が推進したいと考える上記の取り組みにおいては、本会が長年にわたって築き上げてきた組織と事業を尊重しつつ、そこに「学術・技術・芸術のバランスのとれた運営とそのような体制での若手教育のシステムづくり」のスローガンを掲げることによって、速やかな実行を心がけたいと思います。また、中島会長時代に検討され、古谷会長時代に継続された中長期計画「ビジョン2025」の継続と中間評価も行いたいと思います。

世界に目を向けると、学術分野におけるわが国の国際的ステータスの低下は顕著なものがあり、ランキングなどの評価には反映されない本質的な面での地盤沈下には従来にも増して注意が必要と思われます。たとえば、アカデミアや先端技術分野でのわが国の研究者・技術者のコミットメントの低下などはその最たるものと思われます。なんとしても若手人材の育成などを通じて確かな回復の流れへともっていく必要があります。

私は、ほぼ40年にわたって、本会会員として自らの専門分野である構造を中心に本会諸活動に参画してきたほか、副会長や監事、学術理事として本会の運営にも従事して参りました。また、文部科学省や建築士関係の委員や大学評価関係の委員も多数務めさせていただきました。さらに、実務関係の活動にも多く参加させていただきました。学術関係では、本会の論文集の英文化(JAR)をはじめ、国際学術専門誌(スイス)の総合編集長などを経験することにより、科学情報のオープン化をはじめとする学術における世界の趨勢を肌で感じるとともに、日本における若手研究者・技術者・建築家の教育・育成の重要性を強く意識させられています。これらの経験を活かしながら、建築界と本会の一層の発展のために、「至誠無息」の信条のもとで一身を捧げたいと存じます。ご支援を重ねてお願い申し上げる次第です。